

---

---

「山水の変」の新解釈

—吳道玄、李思訓、李昭道の役割及び文人山水の起源について—

---

---

唐代の画論家張彦遠は『歴代名画記』巻一「論畫山水樹石」の一節に、「是れに由って、山水の変は吳(吳道玄)に始まり、二李(李思訓・李昭道)に成る」と論じた。しかしながら、張彦遠は吳を「始まり」、二李を「成る」とする理由を同節に明言しておらず、従来様々な解釈が挙げられている。ことに明代の董其昌の「南北宗論」に影響されたゆえか、吳道玄が描線に変革をもたらし、淡彩の意識を高め、さらに水墨技法に属す「皴」を発明したことを「始まり」とし、二李が青緑山水(或いは「金碧山水」と混同する)を高度に成熟させたことが「成る」とする解釈が主流となっている。しかし、三人の「山水の変」における役割についてのこの解釈には認識に混乱があると思われる。その原因は二つあるだろう。第一に、先入観に影響され、真筆遺品が現存しない吳道玄、李思訓、李昭道という三人の山水画作風や様式、そして彼らの生涯についての総合的調査が困難であること。第二に、張彦遠が「山水の変」論を提出した理由について誤読の可能性があることである。

本発表ではまず、敦煌と中央における山水遺品に考察を加え、歴代の画論及び文学史料を再検討することを通して、隋代から徐々に線描意識が変化し、皴の使用、更に自然主義的傾向が既に認められることや、初唐絵画は想定したより重彩趣味ではなかったことなどを論証する。次に、吳道玄の「蜀道に於いて山水を写貌する」即ち「造化(自然)を師とする」という行動に注目し、前代の一連の画法変化をまとめた彼が「形似」というより「神似」及び「真」を求めていたことを「始まり」の意味と解する。また「山水の変」を成した「二李」の山水については、彼らの生涯、当時及びやや下る時代の詩文や画論及び評価について先入観を取り除いて精読すれば、後世が想定したものとは全く異なっていることに気付く。李思訓は山水を「神仙山水」としての使命から解放し、背景から独立させた。彼こそが初めて「意気」または「士人気」、即ち画家に個人の志向や思想を山水に託す自由を与え、李昭道とともに水墨技法を山水に取り入れた人物であると解される。即ち、二李の山水は一種の文人趣味のあるものと推測される。彼らが成したこのような山水様式はのちの王維や張璪に受け継がれ、後世のいわゆる文人山水の濫觴になったことが「成る」の真意だと考える。

『歴代名画記』に張彦遠が中心に論じたのは「神似」と「意気」という二つの概念であることを鑑みると、「山水の変」論で三人を山水画史上に位置付けてみせたのは、具体的な例を示すことによって張彦遠自らの絵画理論を上手く説明しようと意図したからではないかと思われる。本発表では、実物遺品と史料の両方から新たな考察を加えることによって、「山水の変」をめぐる議論に新しい視点を提供したい。